AD ALTIORA SEMPER

神戸市外国語大学学術情報センターだより 第 44 号

本と僕のめぐりめく関係

武内　紹人

本からフィールドへ

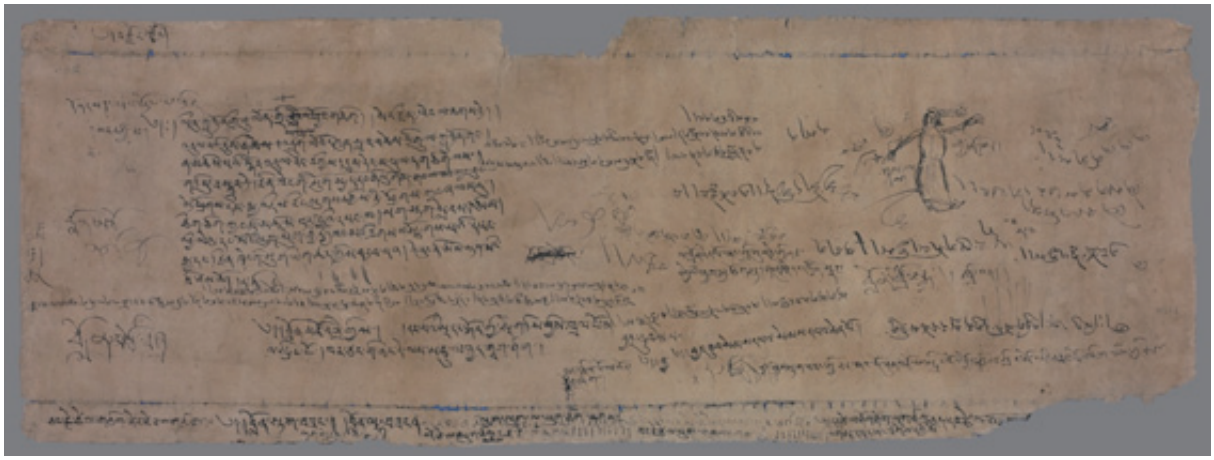
子供のころは本の虫だったらしい。家に帰るなりランドセルを放り出し、とりあえず本にかじりついていた。親戚からもらった時代物の世界少年少女名作全集を繰り返して読んでいたので、古い漢字や仮名遣いを覚えてしまい、学校で先生とトラブっていた記憶がある。

変わったのは大学に入ってからだ。文学部に入学したけれど、文学や哲学書など誰かが意図的に書いた「本」には興味がなくなり、もっと「生」なものが研究したくなった。で、言語学を専攻することになり、チベット語を始めたのだが、大量にあるチベット語の仏典より、生きている人のことばを調査したいと思った。そこで、ネパールやインド、チベットに行って、チベット人の話し手の言語の調査（フィールドワーク）を始めた。

そして、フィールドワークの方法論をもっと勉強しようと留学したアメリカで、チベット語の古文書と出逢った。敦煌石窟やシルクロード沿いの遺跡から発掘された 8 世紀から 10 世紀の最古のチベット語文書である。その中には仏典もあるが、手紙、契約、占い、落書き帳、訴訟文など多種類の生活に密着した文書が含まれていた（写真 1）。それらを初めて読んだ時、とても難解だけど、「生きた」言語だと感じた。書き手の息吹が感じられたのである。それで、現代の諸方言と並んでそれらの先祖と言える古文書を読み解きたいと思うようになった。

フィールドから古文書へ

古文書の多くはヨーロッパの探検隊によって発掘され、いまはヨーロッパに保存されている。ロンドンの大英図書館とパリのフランス国家図書館が代表で、ほかにも、ロシアのサンクトペテルブルク、スウェーデンのストックホルム、ドイツのベルリン。そこで、ヨーロッパ各地を訪れて古文



(写真 1) 敦煌写経生の落書き帳

書の原典を調査するのが、つぎの仕事となった。

1986 年にパリとロンドンで初めて古文書の現物を見た時は、柄にもなく感激した。ただ、彼ら（文書たち）と 30 年以上お付き合いすることになるとは思わなかった。それ以来、毎年訪欧することがルーティーンとなった。とくに大英図書館では、チベット語文書すべての整理とカタログ化を請け負った。それがどんなに大変かはその時何もわからずに。

古チベット語文書は、紙以外に木、骨、皮、石などに書かれているが、一番多いのは紙文書である。ただ、その形は様々だ。一枚の紙もあるし、長い巻物もある。巻物に折り目をいれアコーディオンのようにして、途中から開けて読めるようにした折り本、二つ折りにした紙を重ねて真中の折目を綴じチョウチョの羽の様にした胡蝶装、本に近い冊子本など。ただ、砂漠の遺跡から出土したものは、完本ではなく断片がほとんどだ。

大英図書館では、それらの断片をガーゼで覆い頁にまとめて綴じて、大判の洋本として保管していた。私は、頼み込んでそれらの本を解体し、ガーゼをはがし、断片を修復してもらった。その後、文書を解読し、出土地や内容ごとに分類してカタログを作成する。やっていると、小さな断片には、数文字しかなかったり、あっても汚れて読めないものもある。こっそり捨ててしまいたい衝動に何度も駆られた。でも、断片の一々には発掘者であるスタインの自筆で、「M.I.ix.12.e.」のように詳細な出土地番号が書かれている。ハンガリー系イギリス人の考古学者スタインは、はるかタクラマカン砂漠の遺跡で、灼熱の日中は発掘の指揮をとり、夜はテントでビールも飲まずに出土物すべてに番号を記入し整理していた。さらに、その全てをラクダに積んで、インドへ、そしてはるかイギリスまで送り届けたのである。それを 100 年後に私が整理している。はじめてから十数年でなんとか紙文書を整理し終わり出版した。その時点で、私は斯界の第一人者になった。というか、見回すと自分以外誰もいなかった。

（写真２）チベット語木簡（ナイフとヘラ）

つぎに取りかかったのは木簡だった。砂漠から出土した木簡は、チベット軍の砦で食料の運搬や占い、宗教儀式など様々な用途に使われた。形も多様だし、実際手で触って遊べるのだから紙よりおもしろい。文を書くだけではなく、ナイフやヘラ、糸巻き、さらには糞ベラとして使われたりもした。そんな木簡の魅力についてはまた別な機会に話したい（写真２）。

再びフィールドへ

図書館へ移されずに幸い現地に残っているものもある。例えば、岩壁や岩石に彫った碑文だ。小チベットといわれるインド北西部ラダックを北に向かって流れるインダス川の広い河原に点在する岩石には、おびただしい数の碑文が残っている。チベット式の仏塔（チョルテン）の絵とそれを書いた人の署名だ（写真３）。

広い河原をひとりで歩き回っている間に、小さなロマンスもあったが、大筋が見えて来た。
強大な軍事帝国だったチベットは９世紀半ばに崩壊し、一部が西方のラダックに移り王国を建てる。その軍隊がこの河原に駐留していたに違いない。「龍年」、「猿年」のような年が 10 以上あるからかなり長期間にわたる。「千人隊長」というタイ

トルがあるから、相当数の軍であったろう。漢人と思われる名前もあるから、敦煌あたりでチベット軍に入り、はるかインドまで来た兵もいただろう . . . 。当時この地に駐屯していた兵士達の様子が眼前に浮かび上がってくる。フィールドワークは、現地の人たちの生の声を聞くのだが、ここでは過去の人々の声を聞く、いわばタイムスリップするフィールドワークなのだ。

再び本へ

フィールドワークでの聞き取りと古文書の解読から得た情報をデータベース化し、出版する。それが私の本作りだった。その本やデータベースは百年後も生き続けるだろう。そこには、フィクションがなく、聞き読み取ったデーターを出来るだけそのまま提示したものだから。

神戸市外大に移ってから、外大生だけでなく京大、阪大などからも院生や若手研究者が来てくれるようになり、アメリカやイギリス，フランスでも後継者が出て来た。おかげで、カタログ作りのようなスレイブワークは、若手に任せられそうな気がする。だとすると、自分はこれまでの蓄積をもとにちょっとフィクションを入れたおしゃれな本を書きたいけど、その才能は疑問だ。

最近、寝る前に漫画や小説を読むようになった。ちょっと現実離れしたものの方が良い。思えば、これまでひとつのノンフィクションを生きて来て、ちょっと違う世界を感じてみたくなっているのだろう。現実を生き始めたこどものころ、目の前に広がるいろんな可能世界に憧れて本を読みふけっていた自分に回帰しつつあるのかもしれない。

（たけうち　つぐひと　総合文化教授）

(写真 3) インダス川河原のチベット語岩石碑文

著書紹介「原爆と検閲：アメリカ人記者たちが見た広島・長崎」

オカザキ監督が教えてくれたこと

繁沢　敦子

原爆と検閲：
アメリカ人記者たちが
見た広島・長崎

繁沢　敦子著
中央公論新社
2010 年 6 月発行

図書館所蔵
N081-14-2060

2005 年下旬から 2006 年にかけて日系三世の映画監督スティーブン・オカザキ氏のドキュメンタリー制作に関わった。出演してもらう被爆者やロケ地の候補選定から、撮影期間中のクルーの宿泊と食事の手配、終了後の出演者宛ての礼状送付など、日本側の制作過程のほぼ全行程に携わった。2007 年 6 月にニューヨークで行われたプレミア上映会に参加した際には、深い感慨を覚えるとともに、今度は自分の作品を世に出したいと思った。

それ以前からやりたいことはあった。しかし、果たして何から始めればいいのか。夢を形にする方法が分からなかった。上映会終了後にスティーブンと食事をしながら、常々書きたいと思っていたテーマについて話した。スティーブンからは数日後、メールがあり、「一歩一歩、目標に向けて前に進んでいくこと」が実現には必要だとあった。

仕事を持っていると、それを理由にしてなかなか一歩が踏み出せない。何らかのコミットメントを自分に課すことが必要だと思い、大学院に入ることにした。一年生の前期のある授業でレポートが課題となり、それをちょうど書き終えた頃に、ある研究会で報告を頼まれた。報告を聞いた人から論文集への寄稿を呼びかけられ、それを拡大する形で修士論文を書いた。それを出版社に送ったところ、出版してくれるという。それであればと、修士論文を補足するつもりで史料収集のために渡米した。

モンタナ州立大学マンスフィールド図書館やメリーランド州カレッジパークの米国立公文書館、ワシントンにある米議会図書館。初めての海外調査で、そのいろはも分からないまま、ただ夢中で文書の写真を撮り続けた。それでも、今考えると不思議なほど、新史料との出会いに恵まれた三週間の旅だった。こうした偶然が重なって完成したのが本書である。

これはまさしく、「ビギナーズラック」というものであろう。しかし、それを可能にしたのは最初の一歩があったからだ。残念ながら本書はこの春、絶版になってしまったが、一歩を踏み出す大切さを教えてくれた思い出深い作品である。

ちなみに、スティーブンに話したプロジェクトは異なるテーマのものである。そちらはようやく数歩踏み出したところだ。

（しげさわ　あつこ　英米学科准教授）

創立 70 周年記念事業

図書館イベント開催報告

2016 年 6 月、神戸市外国語大学は創立 70 周年を迎えました。
ここでは記念事業として図書館で催したイベントをご紹介します。　（河野・須浦）

パネル展示「神戸市外国語大学 70 年の歩み」

1 期 (ラーニングコモンズ)

2 期
(学舎 1 階)

2016 年 6 月の神戸市外国語大学 70 周年に合わせ、その歴史を振り返る展示を行いました。1 期 (2016 年 1 月 29 日～ 3 月 18 日) は、神戸研究学園都市移転（1986 年春）前の六甲学舎の写真を中心に「写真に見る神戸市外国語大学 70 年」パネル展示を、図書館ラーニングコモンズにおいて行いました。2 期（2016 年 3 月 22 日～ 12 月 22 日）は学舎 1 階において、1 期の展示内容に加え歴史パネル、写真パネル（授業風景、クラブ・サークル、語劇)、現校舎の模型などの展示を行っています。

ほんの Re ユース

6 月 4 日記念式典当日の午後、図書館ラーニングコモンズにて Re ユース（= 本のリサイクル）を実施しました。図書館ではおよそ 3000 冊の本を用意しました。大変多くの方に興味を持っていただいていたようで、閉館の時刻まで途絶えることなくご来館いただきました。

太田辰夫文庫中国古典籍展示

2016 年 5 月 28 日に開催された中国近世語学会を機に、図書館ラーニングコモンズで『太田辰夫文庫 中国古典籍展示』を展示しました。また、閲覧室では太田辰夫先生の著作展示も行いました。

←
ラーニングコモンズ

→
閲覧室

図書館からのお知らせ

書庫１階が自由に利用できるようになりました

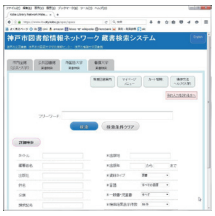
橋本　真里

2016 年 4 月､図書館の書庫 1 階はあらたに「開架書庫」としての供用を始めました。「開架」とは聞きなれない図書館用語ですが、「利用する方が直接本棚から本を取り出せる方式」のこと。つまり誰でも自由に使えるようになった、ということです。

これまで書庫に入れるのは教職員と大学院生のみでしたが、一般的な和洋書を置いている書庫 1 階を公開することによって、多くの方にこれまでより多くの蔵書を直接手にとっていただけるようになっています。＊　図書館のメインフロアである閲覧室に置かれているのは約 9 万冊です。これに加えて、書庫 1 階にある約 14 万冊が直接利用できるようになりました。

2015 年度まで

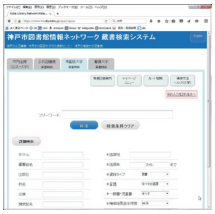
蔵書検索　　申込書記入･カウンターで申込　　入手



ロケーション
書庫 1F

2016 年度から

蔵書検索　　入手



ロケーション
開架書庫

もちろん、蔵書検索をせずにふらりと入って、本棚の間を散策することもできます。予期しなかった本とめぐりあうことがあれば、それこそが直接利用することの醍醐味と言えますね。図書館で受け入れる本はまず閲覧室に出されることが多く、書庫には出版年が比較的古いもの、内容が専門的なものが置かれていますが、その中にあなたに必要な 1 冊があるかもしれません。

「開架書庫」オープンから約 2 ヶ月経って、利用は増えてきましたが、ご存じない方もまだまだ多いと感じています。次のページは、まだ書庫 1 階に入ったことのない方のための「開架書庫バーチャル利用案内」です。

＊書庫 2 階･3 階の資料（雑誌､旧分類図書等）の利用は、従来どおり申込書に記入の上カウンターへの申込が必要です。

はしもと　まり（図書館職員）

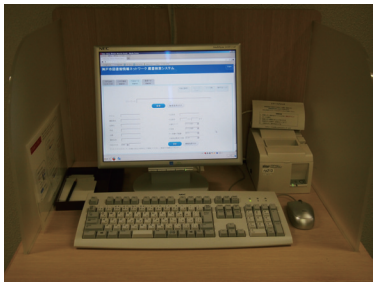
開架書庫ってどんなところ？

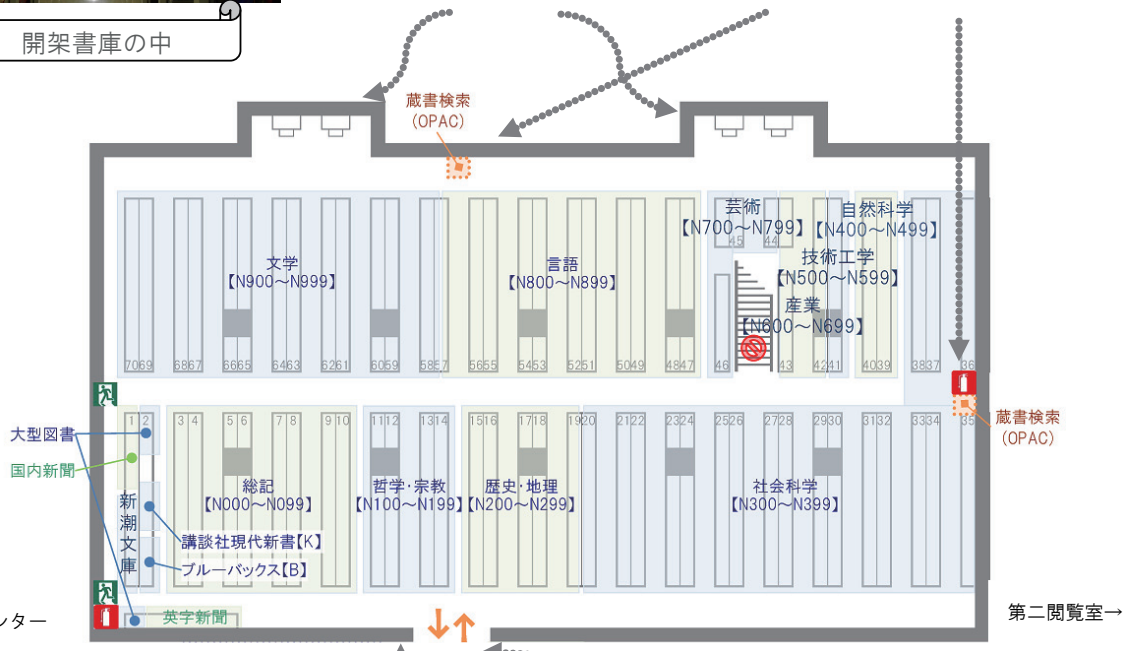
請求記号は本棚の横にあります

開架書庫の中

資料を使うための机(キャレル)

蔵書検索端末(OPAC)は 2 台あります





開架書庫への行き方

第二閲覧室に向かって進むと

左手の壁にこんなサインが

ここが開架書庫の入口です

書架に落下防止装置を取り付けました

2016 年 3 月、図書館の耐震対策として、閲覧室の書架 1 段目、２段目に書籍落下防止装置を取り付けました。また、３段目、４段目には落下防止滑り止めテープを貼付しています。

図書館の開館時間が変更になりました

2016 年 4 月より図書館の授業期開館時間が延長され、さらに利用しやすくなりました。これにより、 従来の試験期と同様、平日は 8：00（閲覧室 8：40）～ 21：30 の間利用することが可能になります。また、試験期中の 7 月 24 日、31 日には初めて日曜日も開館する予定です。開館時間は土曜日と同じく、10：00 ～ 18：00 です。どうぞご利用ください。

図書館日誌　2015 年 12 月～ 2016 年 6 月

2015 年	
12.1-1.30	展示「司書のおすすめ D」第 31 回
12.9	選書ツアー茶話会
2016 年	
1.4-2.8	2015 年度第 3 回 Re ユース
1.8	Newsletter No.17 発行
	1 月のゼミガイダンス　1 回実施
3.24-3.31	蔵書点検
-	書籍落下防止装置設置
4.1	開架書庫（1F）開放
4.2	英語教育学オリエンテーション
4.5	学部オリエンテーション
-	大学院オリエンテーション
-	Newsletter No.18 発行
4.6-5.28	展示「司書のおすすめ D」第 32 回
4.7-	授業期平日の閉館時間 21：30 に延長
4.9-4.13	初年次教育　学科ごとに実施
	（水曜日 1 回、土曜日 5 回）
4.20	JLP オリエンテーション
	4 月のゼミガイダンス　20 回実施
5.24	LA トークイベント「英詩カフェ」
	5 月のゼミガイダンス　14 回実施
6.4	70 周年記念事業 Re ユース実施
6.4-7.31	展示「司書のおすすめ D」第 33 回
6.7- 6.8	トライやるウィーク（1 校 2 名受入）
6.21	LA トークイベント
	「スペイン語学習のススメ」
	6 月のゼミガイダンス　5 回実施

AD ALTIORA SEMPER 神戸市外国語大学学術情報センターだより
第 44 号　ISSN　0919-2336
「AD ALTIORA SEMPER」とはラテン語で「常により高きを求めて」という意味です
編集・発行：神戸市外国語大学学術情報センター
〒 651-2187 神戸市西区学園東町 9 丁目 1
TEL：078-794-8151 / FAX：078-797-2257
URL：http://www.kobe-cufs.ac.jp/library/
2016 年 6 月 30 日発行　発行責任者：センター長　太田斎